



金 融 財 政

2007年(平成19年) 1月22日 (月) 第9803号 (購読料金 月額税込み5,565円)

「企業倫理」は無用か

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



新年から政界だけでなく経済界でも不祥事が相次いだ。最新では大手菓子製造業「不二家」の消費

期限切れ原料使用などによる経営が露呈し、企業道徳をめぐる報道も目に付いた。私は、フランスの哲学者コント・スボンヴィル氏の「資本主義に徳はあるか」(紀伊国屋書店)を正月に読んだ直後だったので、最適事例と思えた。頭の整理に以下ご紹介したい。

氏の答えは明快である。「資本主義には本来道徳が皆無である。よって企業不祥事を道徳的に糾弾するのは間違いだ。道徳のない世界(非道徳)に道徳違反

(反道徳)は起こりえない」——これが結論である。だから最近流行の「企業倫理」論も無用として、違和感を隠さないこうした結論は経営陣にとって鼻白むものである。

以上の結論を氏は、世の中を秩序立てている仕組みとして4つの概念を用いることで、論理展開をする。

第1の経済秩序では、科学・技術を駆使し、利潤追求する市場原理により達成

される。そこで歯止め利かない経済原理を外制する装置として、第2に、法律や国家による制約が必要になる。だがこれと人間個人がつくり出すもので、絶対ではない。

そのため第3の秩序に、個人の行為を外側から規制する道徳(義務と責任)が必要になる。最後の第4の秩序は、義務と責任を伴わない倫理あるいは愛の装置。これで社会秩序が保持される。

こうした哲学者による社会経済分析の整理は、私には新鮮であった。さすが哲学の国フランスと思つたのは、本書の後半にある講演後の経営陣との積極的な対話編で、圧巻である。

フランスの経営陣も当然簡単に氏の説に納得はしない。自分の会社の道徳重視のどこが悪いと詰め寄る。しかし、哲学者は断固言い放つ。「企業という法人格には道徳はまつたくない。あるのは企業にいる一人ひとり個人のもつ道徳、さらに倫理である」。すなわち、第3と第4の秩序の存在である。

不二家は道徳の欠如ではなく市場原理の秩序を乱した事例である。企業存続のヒントは、意外に足元にある。

CONTENTS

●解説 台頭する中国、 米国と金融覇権争う(浜田和幸)	●コラム・コラム (藤原作弥) ……………	11
—外貨準備・輸出競争力にこに……………	●追加型株式投信ランキング〈12月〉……………	13
2	●インタビュー	
●BANCO	—中核資本、欧米一流行並みの8%へ	
アベノミクスの優先順位(成相 修)……………	—北山・三井住友FG社長に聞く……………	14
3	●あと・らんだむ (神崎倫一)……………	15
●照一隅 円安が示す魅力不足(矢)……………	●インサイド 証券業界の「あの会社」……………	17
5	●「本」と遊ぶ (中山恒彦)……………	18
●マーケットリーダー (牧野義司)……………	●資料 2006年9月期銀行決算⑥……………	19
8	●北風・南風 (東京)……………	20
●政経深層 甘過ぎる「幕引き」(岡 憲策) ……		
9		
●国際経済 ノワイエ仏中銀総裁に聞く……………		
10		